

## 3

## 中国における関東大震災の報道をめぐって

王 鑑\*

### 1 はじめに

1923年9月1日午前11時58分、関東地方でマグニチュード7.9の巨大地震が発生した。死者は10万人以上、行方不明者4万3000人あまり、東京をほぼ全壊にした。この大地震は後に関東大震災と呼ばれ、日本に甚大な被害をもたらした。

この「未曾有」の天災に中国各界が高い関心を示し、新聞、雑誌、各メディアは速やかに報道し、日本への支援を呼びかけた。

20世紀初頭から、中日両国との間で一連の事件が発生し、両国の関係はかなり緊迫していた。1915年、日本は中国に二十一ヵ条を要求し、その後青島を占領するようになった。1919年に中国では、五・四運動が勃発し、両国の関係は一層悪化した。特に1923年に起きた旅順・大連回収運動と長沙事件<sup>1)</sup>で、中国国内で、排日ムードが一層高まった。その後、対日経済絶交運動も全国で勢いよく展開されていた。このような時代背景の下で、関東大震災が発生したが、中国の各メディアはほぼ一斉に日本打倒から日本応援へと変わった。それは大変興味深いことである。

一体、当時の中国ではどのように関東大震災について報道していたのか、なぜ中国のメディアが日本への支援を一生懸命呼びかけていたのか、中の国民はどのように助け合って震災を乗り切ったのか。先行研究では、関東大震災と中国というテーマに関しては多くの蓄積があるが、日本の先

行研究では中国人労働者の虐殺事件に関する研究が多く、メディアの報道の整理や中国の支援に関する研究は割と少ない。一方、中国の先行研究では、日本への支援に関する研究が多いが、日本側が中国人留学生への支援の紹介が割と少ない。

本稿では、先行研究を踏まえで、『申報』を中心に、関東大震災に関する中国の報道を整理し、関東大震災に対する中国の態度、学んだ経験と教訓、および中国の日本への支援と日華学会が中国人留学生への援助という四つ面から考察してみたい。

### 2 報道からみられる中国の態度

関東大震災を最も早く報道したのは『申報』であった。地震発生後の翌日、9月2日に「日本之大地震」という速報ニュースが報じられた。当時、東京の電報や電話はまったく通じない状態になつたが、『申報』は大阪のロイター社から得た情報を速やかに報道した。

大阪では地震が起り、その揺れは6分間も続いた。東京では恐らく大地震が起つた。東京の電話線がすでに切れている。午後2時25分に再び余震が起つた。大阪観象台によると、震源地は伊豆半島、地震計で地震は1時間半も続いた。東京横浜横須賀は恐らく重大な被害を受けた。東海道鉄道の数箇所に

\*北京大学医学人文研究院

重大な損傷があり、名古屋、大阪、神戸はあまり被害を受けていない。長崎は地震を感じなかった。東京と大阪の間の電報電話線は全部切れた。この状況から東京の地震がかなり激しいことが推測できる。情報によれば、富士山周辺は特に地震が激しく、それは富士山が火山であるためであろう。横浜港の船から無線電報をもらい、横浜は火災が起ったということである（筆者訳）。

『申報』は、1872年にイギリス人のメージャーが当時中国の重要都市である上海の租界で創刊した新聞である。1907年に経営権が完全に中国人の手に移され、後に中国で発行部数が一番多い有力な大新聞となった。9月3日付の『申報』に載せた「日本地震と大火災を悲しむ」という時評は日本の大地震と大火災の悲惨な状況を報道し、「わが国の人々は迅速に援助すべきだ」と呼びかけた。9月3日から、『申報』はロイター社から得た日本地震と火災のニュースを毎日更新し、「日本大地震損害記」を21回連載した。9月24日からニュースの報道とともに、「日本震災後復興記」を13回連載した。

『申報』だけでなく、『民国日報』『時報』『広州民国時報』『盛京時報』『大公報』なども、揃って一面トップで日本の震災を伝えた。「甚だ惨めな巨大災害」「有史以来の最大惨劇」「未曾有の大禍」「空前の災害」などの語句でこの地震を描き、それに対する驚愕と同情の意が読み取れる。9月3日の『申報』では、「これは人類最も悲惨な災害ではないか。人類なら誰でもそれを聞いて悲しむ」と評していた。9月5日の社論である『吾国民の日

本大災害に対する態度』の中では、「人間なら誰でも同情し、涙を流す」という文書が書かれ、同情の意を一層高めた。各雑誌にも文字だけでなく、被災地の写真を入れて、被災状況が詳しく報道された。

地震でなくなった学者のことを惜しみ、それは「日本だけでなく、世界の損失」だと評した。東京帝国大学図書館の蔵書75万冊が火災でほぼ全焼されたことについて、それは如何に惜しむことだと評した。<sup>3)</sup> 地震による損失について詳細に統計し、フランスのヨーロッパ戦争での損失とほぼ同じだと指摘した。<sup>4)</sup>

地震状況を調査するために、多くの中国人が日本へ行って、実地調査も行った。特に詳細に調査し、記録したのは、楊叔吉（1884-1966）であった。楊叔吉は陝西省赤十字のスタッフで、日本での留学経験がある。9月9日、日本大震災のニュースを陝西省に伝わり、省長はただちに日本へ慰問のメッセージを送ると同時に、寄付金を集め、楊叔吉を日本へ派遣した。11日に楊叔吉は西安を出発し、30日によくやく東京に到着した。東京で、楊叔吉は伊集院外相、後藤内相、犬養毅通相と山本首相を歴訪し、慰問の意を表した。また、楊叔吉は寄付金1万元を渡した。

その後、楊叔吉は地震現場へ行き、震災地の人々を慰問するとともに、地震状況、損失状況、地震後の国民の反応、国の政策、法令などについて詳しく調査し、記録した。帰国後、それを『日本大震災実記』という本にまとめ、11月6日に印刷し、25日に発行した。本の序論は、楊叔吉の日本人の友人である水梅野暁が著した。水梅野暁は後に中国人留学生の中国送還に尽力した人物である。水梅野暁は序論で楊叔吉がこの本を著した経緯および意義を述べた。

我国と国民が蒙りたる災変に対する深甚たる同情を表すと同時に、我官民の変に応じて残壊後の局面收拾に対する建設の一端を伝え自国民の警策に資せんとする真正なる爱国心を以て、本書を編せられたるものなるべしと信じる。<sup>5)</sup>

中国では地震の発生が少なく、地震の状況につ



図1 『申報』1923年9月2日

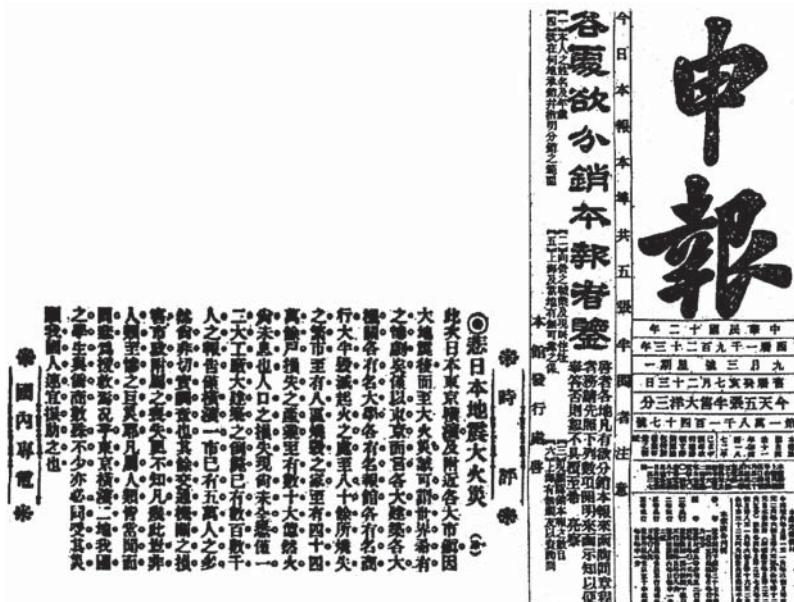


図2『申報』1923年9月3日

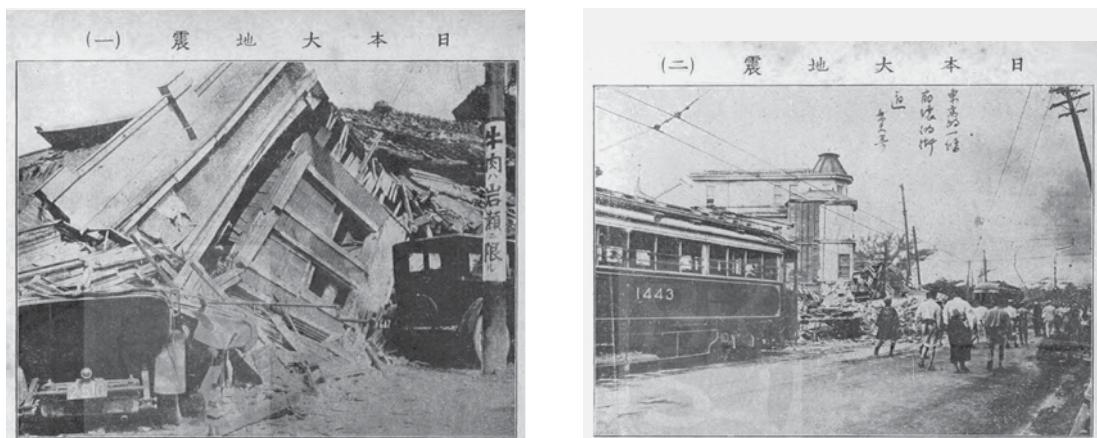


図3『東方雑誌』1923年第16期 1頁

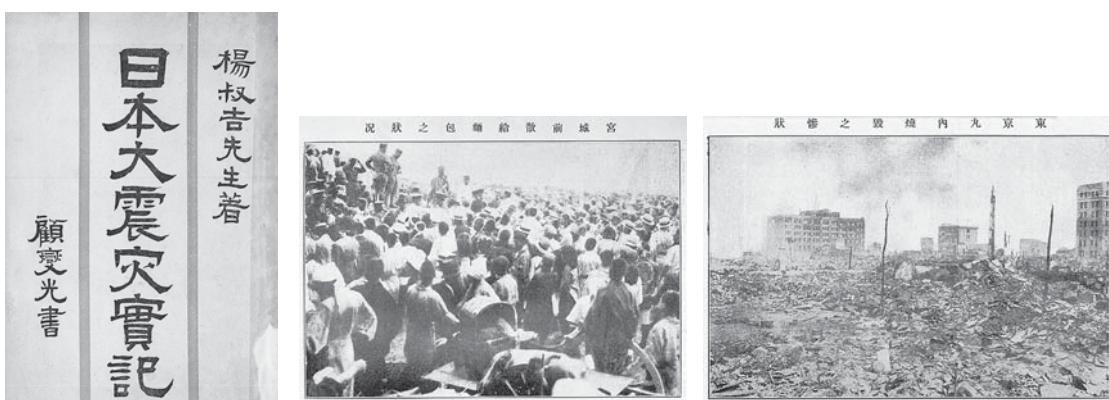


図4 日本大震災実記

由長榮製  
G 調 日本地震歌  
吳興文學研究會  
全集四

三三五三二 — | 一 一 二 一 六 — | 五 五 六 五 | 二 一 二 三 二 —  
可憐日本人 忽遭大地震 海嘯火災相並行  
三三五三二 — | 一 一 二 一 六 — | 五 五 六 五 | 二 一 二 三 一 —  
橫濱東京城 慘狀真傷心 死傷人民百萬人  
三三一三五 — | 三 三 一 三 二 — | 二 二 二 二 | 二 一 二 三 五 —  
燒燬公使館 商場都燬盡 我國同胞也死數千人  
五五三二一 — | 二 三 二 一 六 — | 五 五 六 五 | 二 一 二 三 一 —  
損失該聰聞 恢復究難成 可見野心勿可逞

図5 日本地震の歌

いて知らない人さえいた。しかし、中国において地震がまったく発生していなかったわけではない。たとえば、雲南省の大理においては、1925年3月15日に大きな地震が発生し、建物が倒壊し、多数の死傷者が出ていた。楊叔吉の著書は当時の中国にとって地震の常識を普及するための重要な書籍になったといえる。

さらに当時では、日本の地震をテーマとする詩歌、歌も作られていた。呉興研究会が作った「日本地震の歌」は、日本の災害への同情の意に満ちている。また、上海の申江大劇院は、「日本大震災」というドキュメンタリ映画を3本連続上映し、日本国民への救済を呼びかけた。

このように、関東大震災後、中国の各メディアは震災のことを積極的に報道し、同情の意を表すとともに、日本への支援を強く呼びかけていた。

### 3 関東大震災から学んだ経験と教訓

前述したように、中国では地震がほとんど発生しなかったので、多くの国民は地震についての知識が不足していた。関東大震災の発生後、中国各地の新聞で毎日のように震災の状況を報道し、地震という言葉が広く知られるようになった。しかし、地震の原理や原因などをまったく知らない人が多く、鬼神の仕業などだという流言が広く流布されていた。

ところが、関東大震災以後、地震のメカニズムを科学的に説明する文章が急増した。「地震講座」や「地震と地震帯」「地震と災異」など、多くの文

地 震 講 座

地盤鬆一類能對人類發生最直接而最重大損失的地質現象，在我國雖然不比不上日本、意大利等國的頗多，但細聽起來，也並非很少。本刊為要使一般讀者都能明瞭這現象的原因和種種的影響，與乎避免或減少災害的方法起見，特開這「地盤崩落」一欄，準備自本期起，陸續將有關地盤的問題請專家介紹和討論，希資參考。

図6 地震講座

図7 地震と地震震度

章があげられる。特に、子ども向けの地震教育も学校において行われるようになった。

また、「地震研究から鷺峰地震研究所へ」という文章の中で、中国古代の地震に関する迷信的な解釈を否定し、科学的な根拠に基づく地震のメカニズムが説明されていた。

古代では地震は天災だと考えられ、政治と関連付けられた人間のいる大地は、実は鼈の背中であり、鼈が動くと地震が発生するという。現在の科学者は、地球内部のあるところにおいて、受けた力のバランスが崩れたため、地球を構成する岩石がずれ動いて地震が

発生する。この振動はほかのところにも伝わる。普通は縦波と横波の2種類に大別できる。<sup>6)</sup>もう一つの表面波もある。

そして、地震研究の目的については、次のように述べている。

(1) 一般的に言えば、人類生活上の損失の防止。(2) 学術上から言えば地球内部構造の研究。研究によれば、山の中の鳥獸などは地の振動を人間より早く気づくそうだ。それは地震による縦波は空気の縦波に変化をもたらす。この縦波の振動はかなり細かく、人間は気づかないが、鳥獸は気づく。<sup>7)</sup>

そのほかに、地震後はどのような対応政策を探るべきかについて検討する文章も多くみられた。それらの文章では日本政府の迅速な対応と有効な政策が高く評価されていた。

各分野の専門誌では、震災後にそれぞれの分野で行われた政策を検討し、長所と短所について分析した。特に、火災保険問題や金融政策問題、農民問題などが多くあげられていた。農民問題については、「日本地震と農民の損害」という文章において、日本政策の問題点を次のように指摘している。

農民は被災が最も大きかった。家屋の倒壊や金の損失だけでなく、土地や肥料、種なども

火災で変質し、今後の農作物の収穫に大きな影響を与えるに違いない。それにもかかわらず、政府は首都や都市民の救援に力をいれ、農民への援助はかなり限られている(筆者訳)。<sup>8)</sup>

また、各メディアで、最も多くみられたのは、日本への支援の呼びかけであった。

#### 4 中国における日本への支援活動

日本への支援活動に関して、9月3日の『晨報』の社説では次のように呼びかけていた。

わが国の国民は、早期に救済支援組織を立ち上げ、少しでも多くの義援金を募り、大人数の救助隊を派遣し、被災者救済に駆けつけるべきである。

また、9月5日の『申報』の「吾国民の日本大災難に対する態度」という文章では、次のように述べている。

日本人民はこの50年間、列強より抜きんでる事を求めて、学術、政治、軍事、経済の分野において努力しなかったことは何もなかつた。日本は誠に卓越してよく自立するものであつたというべきであろう。天はなぜあわれむことなく、この凶災を降ろしたのであるか。およそ人間であれば、だれか一掬の同情の熱涙をこぼさないものがあろうか。

のことから、同じ人間として、日本を援助すべきだという考え方が中国各地に広がり、中央政府から地方まで、ほぼ全国で日本への支援活動が展開されていた。

##### 4-1 民国政府および地方軍閥による支援

当時の中華民国政府はかなり混乱した状態であった。大総統の黎元洪がその地位を追われ離京していた。当時は、内務総長の凌霤が代理国務総理として政務をとっていた。9月3日、凌霤は特



図8 日本地震と農民の損失

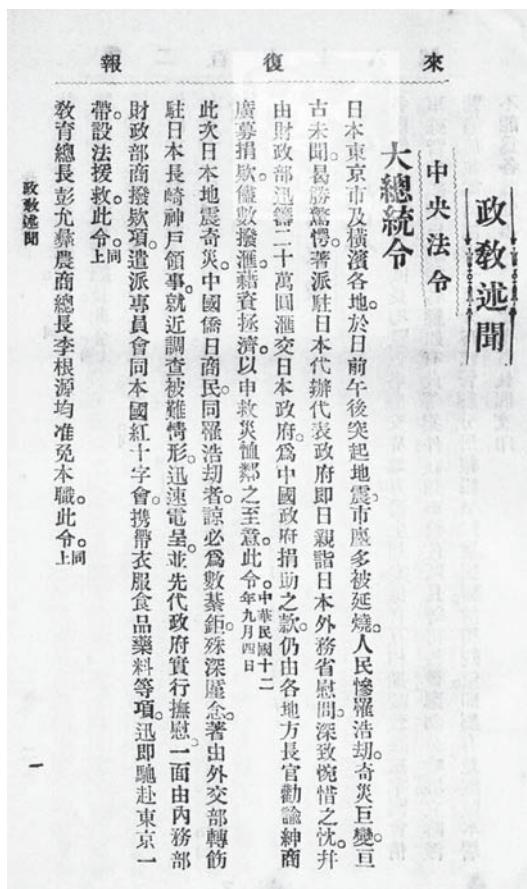


図9 大總統令

別会議を招集し、ただちに日本を支援する方針を決め、大總統令を発布した。

民国政府は日本政府へお見舞いのメッセージを送るとともに、財政部は銀貨20万元を送金した。地方長官は地元の名士たちを説得し、広く寄付を募った。当時の中国は食糧の輸出を禁止していたが、その法令を解除し、民国政府は食糧や医薬品、および赤十字の医療支援チームの24人を乗せた船を派遣した。李鼎新海軍総司令は、軍艦2艘を使って、食糧を横浜まで運んだ。

また、すでに下野して天津で避難していた段祺瑞は、「救災同志会」を立ち上げ、その成立式で参加者から募金10万元を集め、直接山本権兵衛首相に送金した。そして、9月3日に、東北軍閥の張作霖は、手元不如意にもかかわらず、小麦粉を2万袋と牛を100頭寄付した。さらに、すでに退位した溥儀は、金遣いが荒く手元に現金がなかつ

たので、30万ドルの価値に相当する故宮の文物を日本に寄付した。それは当時では相当の大金であった。

それから、9月8日に、日本災害支援臨時委員会が発足され、曹錕直魯豫巡閱使が5万元を寄付した。そのほかに、孫文大統帥や梁啓超など多くの人が日本に物質やお金を寄付したのである。

## 4-2 中国各界の救援活動

### 4-2-1 北京

当時、北京大学の学長である蔣夢麟は、日本の東京帝国大学および各学校あてにお見舞いの電報を送った。そして、北京中国画学研究会の会員たちは、中央公園(現在の中山公園)で、書画のチャリティー展を開催し、義援金を集めた。また、北京銀行の労働組合は、10万元で米や小麦3万石を買い入れ、日本に届けた。さらに、中国で最も有名な京劇俳優である梅蘭芳は、全国芸能界に対して国際義捐大会の開催を呼びかけた。「義援金募集チャリティー公演」で集めた5万元は日本に寄付した。

### 4-2-2 上海

9月2日、上海の20余りの慈善団体は、「しゃんしゃん会議」で日本への救済を決めた。上海総商会が市内の42の団体に呼びかけ、6日に「中国協済日災義賑会」が立ち上げられた。朱葆三が会長、王一亭が副会長となり、事務方を務めた。

### 王一亭の救援活動

王一亭(1867-1938)は、名が震で、字が一亭である。当時、彼は各分野で活躍していた人物である。彼は実業家、書画家、銀行家、政治家で、中国同盟会に参加した革命派の1人でもある。彼は画家としての業績だけではなく、仏教徒としても活発な活動を展開していた。

関東大震災が発生した時、彼の息子がちょうど東京にいた。そのため、地震発生後の翌日に、彼は大震災のことを知った。彼はただちに救援物資を集め、18万5000元の義捐金、米5950包、麦2万包など、多くの救援物資を神戸港に送った。それは日本で海外から届いた最初の救援物資であつ



図 10 幽冥鐘



図 11 2013年9月1日に王一亭の子孫が打鐘式に参加

た。

彼の呼びかけで、中国仏教会は、「仏教普濟日災会」を組織し、震災での大勢の犠牲者を回向した。四大靈場の峨眉山、九華山、五台山、普陀山では、「水陸普利道場」と称する四十九日の法事が営まれた。各方面の回向が終わった後は、「幽冥鐘」を铸造し、1925年に日本に寄贈した。当初、「幽冥鐘」は東京震災記念堂に置く予定であった。しかし、建設資金の不足により、「幽冥鐘」は5年間も放置されたままであった。それを知った王一亭は、同志5人の書画を日本に寄贈した。さらに、1929年に彼は34人の256点の書画を日本で展覧即売し、2118円（現在の300万円に相当する価値）<sup>9)</sup>の収入を日本に寄贈した。1930年によく東京両国の東京震災記念堂が建てられ、毎年の9月1日の11時58分に鐘楼で梵鐘を鳴らす儀式が行われた。

また、1923年9月の『申報』『大公報』『晨報』

『民国日報』に掲載された記事を集計すると、震災チャリティーにかかわった社会団体、機関、学校の数は122で、災害支援活動中にできた各種団体は44にものぼるという。<sup>10)</sup>

## 5 日華学会の中国人留学生への援助

日華学会の中国人留学生への援助については、酒井順一郎氏の「関東大震災と中国人日本留学生——もう一つの日中関係」や、孫穎氏の「二十世紀上半日本『対支文化事業』研究」等の論文で詳細に述べられている。以下、これらの先行研究を踏まえて、詳しい内容をまとめていく。

日華学会（1918-1945）は、1918年4月に創設された団体である。その創設目的は、中国留学生のために学校の選択や入学、転学の手伝い、宿舎の無料供給および実習見学に関する周旋、並に学術芸術の研究や調査、あるいは教育事業の視察に隨時渡来する同国人士のために便宜を図ることである。渋沢栄一（1840-1931）は、日華学会の創始者の1人であり、顧問を務めた。当時、日華学会は日本で中国人留学生と最も密接な関係を保っていた組織である。そして、地震後、中国人留学生を最も多くの援助を与えたのも日華学会であった。

地震発生後、山井常務理事はただちに中国人留学生の宿舎である第二中華学舎、第一中華学舎、および白山女子寄宿舎に行き、留学生の安否を確認した。宿舎はすでに倒壊していたので、日華学会は第一高等学校の学寮の一部を借り入れ、留学生の全員をそちらに移した。当時、朝鮮人が放火する流言が流れていたため、留学生の安全を保護するために、日華学会は戒厳司令部に兵士を3名派遣してもらい、学生の安全を確保していた。

また、「支那留学生救護私案」という留学生を救助するガイドラインを外務省に提案し、出淵アジア局長の許可を得た。その内容は次のようである。

- (1) 東京市の内外各地に散在する留学生を一箇所に収容する事、(2) 収容の場所としては第一高等学校寄宿舎の一部を之に充てたい事、(3) 収容の必要ない留学生に対しては、事情に従い衣食住の供給をなす事、(4) 留学

生を一箇所に収容するについては最も迅速な手段を以て之を周知させるべき方法を講ずる事、(5) 右に要する一切の経費を支弁されたい事。<sup>12)</sup>

このガイドラインを留学生に周知させるために、日華学会事務所は謄写でポスター 5000 枚作成し、学生に配布したり、電柱や埠などに貼り付けたり、新聞で広告を出したりしていた。

また、9月7日から車を2台借り、危険だと判断した留学生を収容したり、食料を配給したりしていた。9月末までに収容と寄食した人員は、総計 1384 名で、提供食事数は 4152 食に達した。<sup>13)</sup> ところが、朝鮮人や中国人を虐殺する事件などが次々と起り、日々不安であった留学生は、日華学会に外務省との帰国の斡旋を申し出た。その結果、出淵局長は、「帰国させたほうが根本的に危険を無くす良案で、出来る限り便宜を与えるべき」と指示し、日華学会に送還事業を委託した。<sup>14)</sup>

1923年9月14日から、日華学会は5回にわたって留学生を中国へ送還し、合わせて 452 名の留学生が無事に帰国できた。第2回目以後は、帰国留学生が神戸港で多数の機構から慰問品を受け、上海では多くの中国救済団体の出迎えもあった。東方通信社の記者である水野梅暁（『日本大震災実記』の序言を書いた楊叔吉の親友）は、旅中の斡旋に充たるために自ら進んで船に同乗していた。

関東大震災において 26人の中国人留学生が死亡した。死者の靈を祀るために、10月8日に本郷区龍岡町麟祥院で追悼会が開催された。数百名の

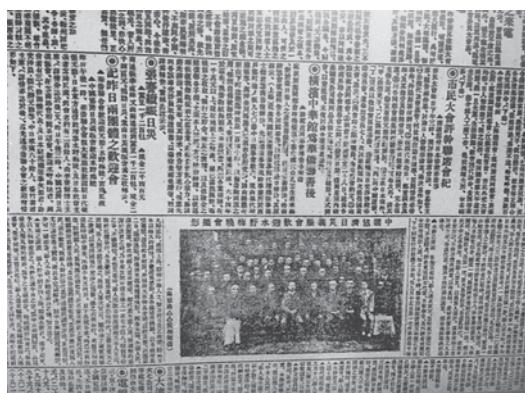


図 12 10月21日付の『申報』に載せた上海で中国救済日災義振会が水野梅暁らを歓迎する写真

中日の学生のほかに、岡野敬次郎文部大臣、塚原督学官、岡部外務書記官、中国代理公使施履本などの政府関係者が多く参加した。1924年9月27日に、麟祥院境内に「中華民国留学生癸亥地震遭難招魂碑」が建設され、その建築費の 447 円 70 銭は民間人士の寄付金であった。

また、中国側の中国留日同胞被震急賑会、上海中華教育團協濟日災会などの団体は、日華学会に感謝状を送った。<sup>15)</sup>

細川候爵閣下  
山井先生執事  
貴國此次奇灾举国惶恐环球震惊当创举  
痛深之余为整理恢复之计日不暇给野野  
栖栖敝国居留学生同丁斯厄  
远道闻知正苦无法極救乃荷  
閣下情殷作楫谊切同舟指囷廩之食之民  
免成涂餒里药尽扶伤之雅大起疮痍而且  
广厦用蔽秋风墟墓悉施  
仁泽慈航普渡家山有遄返之期资斧齊頌  
逆旅去号咷之苦凡茲琐削尽托  
帡幪受者固頂踵可捐不知所报闻者亦肝  
胆俱照共歎難能除呈请敝國  
元首題贈  
貴学会匾額外肅此馳謝祇頌  
台祺并祝  
貴学会日臻隆盛

中华留日同胞被灾急赈会  
正主任理事 熊希龄、  
副主任理事 汪大奕、  
总务部主任 王敬芳、  
总务部副主任 陈延龄

11月1日

貴國大震灾之际蒙  
貴會对于敝國被難學生  
奔走救护不遺余力  
厚誼高情莫名欽感謹申  
謝悃永志不忘此情  
日華學會公臨

中华民国 12 年 10 月 10 日

このように、「日華学会」の尽力により、中国人留学生の死傷者と被害は最小限にとどめることができた。

## 6 おわりに

関東大震災という未曾有の震災に直面した際に、中日両国の国民は政治上の争いを棚上げにし、互いに援助や協力し合う体制が整えられていた。震災後の支援において、政府だけでなく、民間団体、友好人士が大きな役割を果たした。日本は自然災害が多発する国である。日本では自然災害防止などの多くの経験が積まれてきた。そのため、中日韓防災協力システムや東アジア防災共同体などのような機構を作り上げれば、日本の防災・災害復興の経験はきっと東アジア各の災害防止や災害減少に役立つことができると考えられる。

### 注

- 1) 長沙事件とは、1923年6月1日、長沙において発生した反日運動を鎮圧するために日本海軍陸戦隊が上陸した事件。
- 2) 「日本之大地震」『申報』1923年9月2日。
- 3) 『史地学報』第二卷、上海商務印書館、南京高等師範史地研究会、p. 150。
- 4) 『雑俎』第七期、p. 777。
- 5) 楊叔吉『日本大震災実記』中国紅十字会西安分会、中華民国十二年、p. 6。
- 6) 斎如『地震研究から鷲峰地震研究所へと』『拓荒1卷1期』、p. 63、1933年。
- 7) 同上。
- 8) 胡浩川「日本地震と農民の損害」『新農業季刊』第2期、p. 111、1924年。
- 9) 野村ひかり「王一亭と関東大震災」『若木書法』6、國學院大學、平成19年3月。
- 10) 李学智「1923年中国人対日本震災の賑救行動」『近代史研究』1998年第3期、p. 287、1998年5月。
- 11) 大里浩秋監修『日中関係史資料叢書7日華学報』第1巻、ゆまに書房、p. 1。
- 12) 今村与志雄『橋川時雄の詩文と追憶』汲古書院、p. 289、2006。
- 13) 日本外務省、外務省記録「文化施設及び状況調査関係雑件」(「文字同盟社主橋川時雄補助ニ關シ稟請ノ件」(1928年8月10日))、日本外務省。
- 14) 日本外務省、外務省記録「総委員会関係雑件」(「東方文化事業総委員会記録編集」)日本外務省。
- 15) 孫穎「二十世紀上半日本『対支文化事業』研究」

『東北大学2008年博士論文』、p. 122。

### 参考文献

- 代華「簡析浙江对年日本関東震災の回応」『鵝西大学学報』12 (12)、pp. 131-132、2012。
- 代華「略論張作霖、張学良父子对1923年日本関東大地震的振济」『内蒙古農業大学学報』、pp. 300-301、2012 (4)。
- 陳祖恩「日本関東大地震中的中国慈善家」『世紀』、pp. 4-9、2013 (2)。
- 尤言「梅蘭芳為日本関東大地震賑災義演」『江蘇地方誌』、pp. 53-53、2008 (5)。
- 梁瑞敏「日本関東大地震与中国朝野的救援」『河北学刊』31 (4)、pp. 89-92、2011。
- 周見『涩澤栄一与近代中国』社会科学文献出版社、2015年。
- 川島真『中国外交の形成』名古屋大学出版会、2004年。
- 酒井順一郎「関東大震災と中国人日本留学生——もう一つの日中関係」『留学生教育』(16)、pp. 37-45、2011年。